

週刊 座、グレート・リーダーズ通信

『インド私録-思い切り取り組んだこの 50 年-』 No.27

今週のキーワード！ 日本とネパール
皇室と王室外交

日本とネパールは 1956 年に国交を樹立して以来、良好な関係にあります。日本は英国、米国とならなくてネパールの主要な援助国として、有償・無償の資金援助のほか、技術協力も行ってきました。また、2008 年に王制が廃止され、その過程において実施された暫定憲法の成立や選挙の実施など、新政府の民主化への取り組みと、新政府と対立してきたマオイストとの和平を支援するため、「国連ネパール政治ミッション」(UNMIN)に自衛官 6 名を派遣しています。

さらに、収録で述べられたように、日本とネパールは両国の皇室・王室間に親密な交流がありました。国交樹立前の 1955 年にも、ネパールの王族夫妻が皇室を訪問しており、国交樹立後は 1960 年 2 月にマヘンドラ国王夫妻が国賓として訪問しています。



エベレスト。写真:ネパール政府観光局

この年の 12 月には日本の皇太子殿下夫妻(現天皇・皇后両陛下)が首都カトマンドゥを訪問されています。このときは、1958 年のプラサード印初代大統領の来日の答礼と併せて天皇の名代としてインド、ネパールを訪問されたのでした。

皇太子夫妻はこの 14 年後の 1974 年、再度ネパールを訪問されています。ビレンドラ皇太子の結婚式に参列するため 2 月 24 日～3 月 5 日の日程でネパールを訪れました。武藤氏はこのときも随行して、首都カトマンズ周辺の名所各所案内をしています。

ところで、『インド私録』には、皇太子ご夫妻の最初のネパールご訪問の直後、武藤氏がもう 1 人の書記官とともに王室クーデターに巻きこまれた顛末が語られていますが、現地にいる日本人がこの 2 人だけだったことで、この記述は貴重な証言と言えるでしょう。

ネパールでの日本人最初の足跡
河口慧海

日本とネパールの最初の出会いは 1899 年、黄檗宗の僧侶、河口慧海(かわぐち・えかい)が、日本人として初めてネパールに入国したことによるものでした。漢訳仏典に不備があると気づいた河

口慧海は、仏典の原型をよくとどめたチベット語訳の経典を入手するため、当時鎖国状態にあったチベットに行く目的で、ネパールに入国しました(ネパールに入る前には、インドのダージリンでチベット語を習得していました)。ルートとしては、ブータン経由も考えられましたが、梵語の仏典が豊富なネパールをチベット潜入失敗の場合の保険と考え最終的にネパールを選んだのです。また、ネパールにはボダナート寺院のブッダ・バジラ師の庇護を受けることができたこと、また、ネパールにはそれまで 1 人も日本人が訪れたことかないというのも、ネパール・ルートをとる動機となったようです。

ここで秘話。武藤氏が 1974 年に皇太子殿下夫妻のネパール行に随行した際、皇太子殿下はこの河口慧海の『西藏旅行記』を携帯されていたようで、武藤氏がタジタジとなる蘊蓄を披露されたとのこと。

第 29 回放送は 12 月 14 日。

6 月 1 日から始まったこの「座、グレート・リーダーズ」『インド私録』も第 29 回で本編を終わります。最終回は、朗読は「あとがき」、トークは 11 月 30 日に行われた公開収録の模様をお届けします。

